

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

プロジェクト

11

ビジネスにつながる IT教育で 新たな発想を実現する

新人にとってタメな上司の典型は、何か問題があればアタマから「教え諭す」タイプである。新人の反論をことごとく排除し、その結果として思考停止に追いやってしまう。だが、言われるままに行動したところで、時代も激変しているから、先輩の成功体験など実は通用しないことが多いのである。

上司や先輩にとって必要なのは、新人自らが問題発見・分析・解決する思考習慣を持たせることだろう。そのためには、いきなり教えたり指示するのではなく、逆に問いかけることで、彼の答えや考えを辛抱強く待つことだ。そして、使い走りではなく、早期から仕事を全面的に任せること。これを逆にいえば、部下を信頼できない上司や先輩が新人の成長を阻害する要因

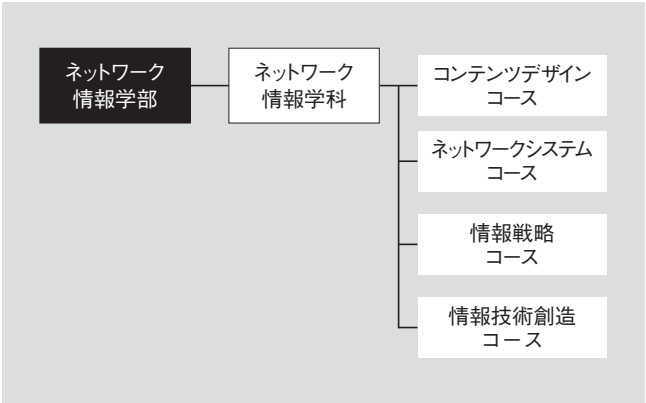


ネットワーク情報学部長
齋藤 雄志

と。いい。

専修大学ネットワーク情報学部は2001年に誕生したが、まさに良い上司(教員)が、部下(学生)を深く信じて、仕事(プロジェクト)を全面的に任せてくれる学部である。「情報」と名の付く学部は1990年代後半から続々と登場したが、このネットワーク情報学部は、そのポジションがそもそも他とは異なる。

「経営学部情報管理学科を改組転換して誕生した学部。専修大学の中では最も理工系寄りの分野ですが、完全な理工系ではなく、専修の文系の



産学協同で テーマに取り組み、 広く社会に発信

このプロジェクトでは、産学協同が珍しくないことも大きな特徴になっている。前出の尾島康仁さんは「フォトニケーション・ブレイス、写真の価値と出会う場所」という、いささか難解なプロジェクトのリーダーだが、大手写真メーカーからもアドバイスを受けている。

「写真の新しい使い方を提案することが出発点でした。20人の学生に2人の先生が担当する大きなプロジェクトなので、サブリーダーとサブプロジ



ネットワーク情報学部 助教授
松永 賢次

エクトを設定。最終的に五つの成果物を作りしました。僕の場合は、1000枚の写真を書き出し、その中から4枚の写真を抜き出して物語をつくるという作業。その写真にコメントをつけてストーリーにしていくと、写真が違う意味を持つてくるのです。それをデジタル化して、パソコンで1枚の写真から自由に見られるようにしました」

景気の好転で、新卒採用が急増したという。だが、現場では、そうした新人の育成が大きな負担になってくる。現代のビジネスは1人の仕事だけで完結しないため、正社員はリーダー的な存在になることを求められているが、満足にこなせない若者が少なくないからだ。このリーダーシップは「教える・学ぶ」だけでは身につかない。専修大学ネットワーク情報学部では、グループによる「プロジェクト」によって、総合的な人間力を育成している。

伝統を活かすことが大前提。幅広いビジネス知識やセンスを教える一方で、IT知識は可能な限り理工系に傾斜という2面性、融合が特徴になっています(齋藤雄志ネットワーク情報学部長)

簡単にいえば、ビジネス系の情報学部と理工系の情報学部の中間に立脚する、文理融合の学際的な学部だが、文系受験生にとっては「ハンダゴテの匂いがしない情報系(別掲、4年・尾島康仁さん)に見えるらしい。

文系だけでなく、理工系の受験者も2007年度から新しくできる情報技術創造コースで同じように学べるが、カリキュラムの基本は共通している。

3年次の「プロジェクト」で グループワークを 成果にする

入学後の1年次には、ネットワーク

情報概論1で基礎を学び、2年次から文系はネットワークシステム、コンテンツデザイン、情報戦略の3コースに分かれる。そのコースで2年次は「個人の技」を磨き、3年次になると「協同作業を学ぶ」プロジェクトが始まる。これがネットワーク情報学部必修の看板授業なのである。マンモス大学ではゼミすら抽選が常識だが、ネットワーク情報学部は1学年250人前後。教員が学生の面倒を丁寧に見られる規模ということもあるが、1年次からグループワークを行い、そのベースを培っていることも見逃せない。

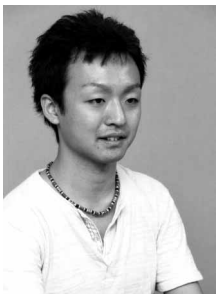
たとえば情報リテラシー演習ではアンケート調査をテーマとして、グループで調査の対象、目的を議論。結果分析から発表までを実行する。教員と学生、学生相互の情報インフラとして、グループウェアの「サイボウズ」も使用しており、そうした緊密なネットワークがあるからこそ、3年次のプロ

ジェクトが華開くのである。

「プロジェクトは協同作業型の自主ゼミです。学生または教員が提案したテーマで5〜15人を1グループとして活動します。まとめたプランを7月にプレゼンし、それから実作業がスタート。すべてを学生主導で運営し、12月の学内発表会で成果を発表するというプロセスになっています。学生はお互いのコミュニケーションを円滑にするため、ネットワークの活用方法を工夫。また、プラン・ドゥ・チェック・アクションのビジネスサイクルを肌身で理解でき、学生も意欲的です。リーダー、サブリーダーも設定するので、複数の学生を同じ方向にまとめていくことも得難い経験になるはずですよ(松永賢次助教)

Student Opinion

学生の自主性を大切にしてくれる大学。皆さんの支援で会社も設立しました。



尾島 康仁さん
(ネットワーク情報学科4年)

高校時代にコンピュータを使っていたので、情報系の大学を探したのですが、かといって理工系のエンジニアになる気持ちもなく、その意味では専修大学のネットワーク情報学部は僕に最適だったという感じですね。学生の自主性を大切にしてくれて、尋ねればいろいろと手助けしてくれる大学であり、望めばチャンスはいくらでもあります。プロジェクトのリーダーも、苦労はしましたが本当にいい経験でした。

そのせいか、噂ではリーダー経験者の就職状況はかなりいいらしいですよ(笑)。今年4月にはSNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)をカスタマイズする会社を設立して代表取締役に任じたので、今では社会人と学生の兼業。日々変化するSNSへのニーズを的確に把握して、サービスを提供するビジネスをやりたいです。会社設立は偶然的な積み重ねの結果なのですが、これも大学と先生と仲間たちのおかげだと思っています。大学での勉強も、プログラムからデータベースの基礎など大変に役立っています。中でも1年次の情報プログラミング演習がハイレベルで実践的でした。将来はグローバルに見聞、人脈を広げたいと考えていて、そのため、海外の経営大学院に行くことも考えています。

松永助教によれば「高度なITを利用しながらも、それを隠しているところに価値があるわけです」という。こうしたプロジェクトの成果は、学内だけでなく、2月には学外展示会「コウサ展(交差点)」に出展している。05年度は日本科学未来館で実施し、400人の来場者を集めたという。尾島さんの「フォトニケーション・ブレイス」は、東京・渋谷のコラボ・カフェでも3日間にわたって披露された。

また、最初から学外でのコンテストを目的としたプロジェクトもあり、0

5年度は民間企業との産学連携による「ETロボコン」(車型ロボットの走行コンテスト)で好成績を挙げた。そのほか、プロジェクトではないが、プログラミングやデータ解析などの国際的なコンテストから、起業家オーディション、神奈川産学チャレンジプログラムなどにも学部生が参加。各種の賞を専修大学にもたらしている。

ちなみに、4年次は卒業制作。学生をうまく刺激すれば、自分でどこまでも伸びていくことを具体的に実証している学部なのである。